



■ シンポジウム終了報告！

2005年度上半期、人間文化研究所が主催・後援するシンポジウムが3件開催されました。いずれのシンポジウムも本学教員・学生と国内外の研究者との研究交流を深め、今後の研究課題を提起する、充実した内容となりました。今後も人間文化研究所では人文社会学領域における多彩な研究交流・発信の場を、創造して参ります。

■ シンポジウム「多文化共生の条件を考える」報告（主催：人間文化研究所）

* 共同研究プロジェクト「名古屋市と東海3県における多文化共生の現状と課題」企画

2005年9月17日(土)、人間文化研究所主催のシンポジウム「多文化共生の条件を考える」が人文社会学部棟1階会議室で開催された。今回のシンポジウムでは、文化人類学者として高名な Harumi Befu (別府春海) スタンフォード大学名誉教授をお招きし、基調講演をお願いした。山田明研究科長の挨拶に続いて、Befu氏は「多民族共生の条件 市民社会・人権・人の道」の標題で講演された。日本社会がグローバリゼーションのなかで、将来外国人労働者を海外から本格的に受け入れた場合、市民社会や人権の観念が十分に根づいておらず、一般大衆が異文化や外国人に対して排外的なハビトゥス(habitus)をもつ同質的な社会である日本で、はたしてどこまで外国人住民の人権が認められ、外国人との共生が可能となるのかと、根源的な問題提起がなされた。



として高名な Harumi Befu (別府春海) スタンフォード大学名誉教授をお招きし、基調講演をお願いした。山田明研究科長の挨拶に続いて、Befu氏は「多民族共生の条件 市民社会・人権・人の道」の標題で講演された。日本社会がグローバリゼーションのなかで、将来外国人労働者を海外から本格的に受け入れた場合、市民社会や人権の観念が十分に根づいておらず、一般大衆が異文化や外国人に対して排外的なハビトゥス(habitus)をもつ同質的な社会である日本で、はたしてどこまで外国人住民の人権が認められ、外国人との共生が可能となるのかと、根源的な問題提起がなされた。

次に大阪市立大学COE研究員の高畑幸氏が「名古屋のフィリピン人コミュニティと地域住民との『共生』」のテーマで、名古屋市中区栄東地区(通称「女子大小路」と呼ばれるこの地区には、フィリピン・パプが集中しており、高畑氏はここで過去数年に渡りフィールドワークを実施してきている)を対象に取り上げ、そこで「日本型市民社会」「日本型多文化共生」が実現されるための条件は何かについての検討を加えた。



最後に、名嶋聰郎弁護士が「外国人の人権基本法制定を目

指す日弁連の取り組みについて」のタイトルで、法律家の立場から、まず日本国憲法における外国人の人権規定についての解釈をめぐる論争や最高裁の「マクリーン事件判決」をめぐる争点などについて紹介したのち、2004年10月に宮崎県で開催された日弁連人権擁護大会シンポジウム第1分科会「多民族・多文化の共生する社会を目指して 外国人の人権基本法を制定しよう」について報告した。



以上の報告に対し本研究科の菊地夏野講師と井上禎男助教授によるコメントと質疑が続いた。菊地講師は高畑報告に対し、フィリピン人女性の実態をジェンダーの視点から見ることの重要性を言い、文化の中の権力関係の解決なしに多文化共生の実現はあり得ないと指摘した。井上助教授は名嶋報告に対し、個別法ではなく基本法を制定する意味、外国人と民族的少数者を並立することの意味等、法学の視点からの疑問を指摘した。最後に全体討論が成玖美助教授の司会で進行され、ラウンド・テーブル参加者から活発な意見が出された。Befu氏が提起した「日本型市民社会」の具体像について今後の多角的研究の必要性を感じつつ、幕が閉じられた。



(人間文化研究所長 村井忠政、同研究所員 成玖美)

■ シンポジウム「仏教と共生」報告（主催：人間文化研究所・名古屋多文化共生研究会）

19世紀から20世紀にかけての資本主義の発達、物質的な豊かさや便利さをもたらした。その一方で、21世紀を迎えた今日、私たちは地球規模での環境問題、人口爆発と飢餓の問題、冷戦後の民族紛争、貧富の格差の問題など多くの負の遺産を引き継いだ。

これらの負の遺産は、結局は人間に幸福をもたらすはずの自然科学の発達によってもたらされたものが大部分である。いまや、科学万能主義がもたらす弊害が多くみられ、西洋思想がゆきづまり、東洋思想が見直されつつある。東洋に淵源を發する仏教は、他の宗教に対し寛大で、同化の力に富み、自然との共生を説く教である。

人間文化研究所では名古屋多文化共生研究会との共催で、去る7月2日、「仏教と共生」のテーマのもとシンポジウムを開催した。



第一報告者の吉田一彦（人間文化研究科教授）は、「日本における仏教の流布・浸透と神信仰」と題して報告、神仏習合の分析を通じて、今日における仏教と神道、寺院と神社との関係を明らかにした。日本の神仏習合は、中国仏教の神仏習合思想

が日本に伝えられたもので、体系的な宗教である仏教が在来の神信仰を飲み込む形で展開したという。

第二報告者のランジャンナ・ムコバディヤーヤ（人間文化研究科助教授）は、「仏教思想としての共生その解釈と実践」と題して、仏教



の教義に表れる共生思想を明らかにするとともに、椎尾弁匡（名古屋出身）、宮沢賢治、牧口常三郎らによる「共生思想の提唱」、「新宗教運動と共生」など仏教者・仏教団体による「共生」思想の実践化について報告した。

第三報告者の筒井正（愛知県立惟信高等学校教諭）は「ア



メリカ日系社会の形成と日本仏教とのかかわり」と題して、19世紀末に浄土真宗本派本願寺派の開教使によってアメリカに伝えられた日本仏教の伝道過程、日系社会の形成と仏教会の関わり、さらに日本仏教のアメリカ化について報告した。

このシンポジウムを通じて、仏教には「共生」と相反するような思想や行動が見られる、仏教の特色でもある世俗性と神聖性をめぐる問題、仏教思想における「共生」は多様に富んでいる、「共生」のありようは、共同体を根本的原理として考える、仏教は、社会形成に寄与し、異文化間における文化摩擦を解消しうる力を持つ、などが明らかとなった。

「仏教と共生」というテーマは、容易ではない。これは、シンポジウムの企画段階から予想されていたことであった。文化多元主義が浸透する移民国家アメリカは、多宗教共生国家という状況が生まれている。テーマとしては難しいが、しかし、乗り越えなければならないテーマでもあることが再認識された。

（名古屋多文化共生研究会 筒井正）

* 共同研究プロジェクト「越境する文学の総合的研究」進捗状況

人間文化研究所では、今年度5つの共同研究プロジェクトを採択しました。その中の1つ、「越境する文学の総合的研究」グループは、着実に研究会の回を重ね、この秋には2つのシンポジウムを企画しています。今後の計画をご紹介します。

1. 9月30日(金)、「越境文学をめぐる懇話会 - 沼野充義氏を囲んで」開催。
2. 10月12日(水)、マインツ大学哲学教授 Andreas Cesana 氏の講演会「新しい世界秩序におけるヨーロッパ」開催。（「研究所 information」欄に詳細掲載。）
3. 10月15日(土)、南ボヘミア大学講師(本学客員研究員) Dana Pfeiferova 氏の講演会「ドイツ語越境作家 Monikova についての一考察」開催。（ドイツ語のみ）
4. 11月9日(水)、「越境作家フォーラムの夕べ」開催。パネラーは多和田葉子氏、デビッド・ゾペティ氏、アーサー・ピナード氏、毛丹青氏。（「研究所 information」欄に詳細掲載。）
5. 11月14日(月)、「オーストリアの越境的作家 Katrin Roeggla 自作朗読会」（ドイツ語のみ）
6. 12月17日(土)、作家・評論家 Leopold Federmair 氏講演会「ドイツ語圏における越境作家たちの諸問題」（ドイツ語のみ）

（1. 3. 5. 6. はいずれも、「越境する文学の総合的研究」グループ主催、人間文化研究所・ドイツ現代文化研究会後援。

会場は名古屋市立大学人文社会学部国際文化学科会議室。）

■ 国際シンポジウム「東アジアにおける次世代育成支援政策と幼児教育改革」報告

(主催:比較国際幼児教育研究会、後援:人間文化研究所)

2003年までは「日本・中国・韓国」の子育て支援に関する比較研究を行ってきた私たちは、2004年度からそのエリアを東アジアにまで拡大し、広く「東アジアの幼児教育の発展」という視野から幼児教育研究を発展させようと奮闘中である。そして、その一つの締めくくりとして計画したのが、この国際シンポジウムの開催であった。シンポジウムは、8月3日から4日にかけて、人文社会学部204教室で、開催された。以下、その内容について簡単に述べる。

第1に、目的だが、表題に即して、すでに昨年もしくはそれ以前から研究交流を行っていたネットワークを駆使して、各国のトップレベルの研究者にお出で頂き、直接研究交流を深めることであった。この点については以下の報告者は、我々の要求を十分に満たしてくださった。

次に内容であるが、参考までに報告者とテーマを示せば、以下の如くである。

1. 「日本の保育・幼児教育制度の問題点と子育て支援政策の動向・課題」 亀谷和史 (日本福祉大)

2. 「韓国の保育と子育て支援の現状と当面・発展課題」 金明順 (延世大学副教授)

3. 「歴史的視野から見た中国の全託幼児園問題」 Xu Zhuoya (南京師範大学教授)

4. 「香港の幼児教育改革」 Veronica Wong (香港教育学院教授)



5. 「台湾における幼児教育とケア：21世紀の再認識と展望」 翁麗芳 (国立台北教育大学教授)

また、この先生方に加えて、特別招待の李基淑梨花女子大学教授、鄭美羅 KyoungWong 大教授、そして仁川広域市の保育政策担当官のトップである張富年女性保健福祉局長及び担当官ユンジェソク氏及びイン八大学院生10名余が加わり、まことに国際色豊かな、面白い会議となった。討論は2日間にわたり、熱心に行われた。なかでも韓国の保育発展課題の難しさ、中国の全託問題、香港の教員養成制度・教育内容改革、台湾の多角的な育児文化対応への取り組み等は興味深いものであった。

振り返れば、この国際シンポジウムは準備過程、事後処理はとても大変であったが、このテーマによる、そしてこの陣容による研究交流および人的交流、即幼児教育研究にかかるネットワーク形成は日本では、もう少しいえば東アジアでは初めての試みであったというのが、大きな救いとなっていたと申し上げたい。これから、第2頁をどうつくり出すか、我々に与えられた課題はますます大きいと感じているところである。

(比較国際幼児教育研究会代表 丹羽孝)



編集後記 朝晩めっきり涼しくなりましたね。愛・地球博が9月25日をもって閉幕しました。私は2度行きました。1度目は暑い日に、故郷から出てきた両親のお供をして、空いている外国パビリオンを中心に巡りました。好奇心旺盛な母と、人ごみや「見世物」が嫌いな父との間で、かなり苦労しました。2度目は涼しい夕方から入場し、前回見られなかったパビリオンをいくつか見学しました。来場人数が予想を超え、大成功だったと報道されています。大きな事故がなかったことや、経済効果があったことなど、確かに成功裡に終わったといえますが、重要なのは、「自然の叡智」というメッセージが来場者にどのように伝わり、今後の生き方に反映されていくのか、ということですね。私の場合、見て回ることに必死で、メッセージを感じ取る精神的余裕はほとんどありませんでした…。この地域の人たちにとっては、むしろ期間限定のテーマパークという感じで、パビリオンを制覇することに意義を見出していたような感もあります。本当に成功だったのかしら、と、腑に落ちない私。皆さんはどのように感じられましたか。

(S)

リレーエッセイ 人間・地域・共生

第2回 「国際平和構想をめぐるヘーゲルのカント誤解」 福吉 勝男 (人間文化研究科教授)

今夏は暑い日が続いた。この暑さのなか私は、『生きる権利の公共哲学 ーヘーゲルとともに考える』(平凡社新書)の仕上げに取り組んだ。いわゆる<国家的>ではなく、<公共的>な視点(公共哲学)から私たちが日々生きていく上で重要な課題としてあると思われる数個の事項について、ヘーゲルの考えをも紹介しつつ論じていくものである。

章立ては順に、<「家族」と暮らす>、<「市民社会」に働く>、<「国家」を創る>、<「福祉」が活きる>、そして最終章が<「グローバル」世界を生きる>である。この最終章のところで、公共哲学の基本的価値理念のひとつとして「平和に生きる権利」は特に重要なものとして述べる必要を感じ、まずヘーゲルの<戦争と平和>観およびカントの<永遠平和>論について調べ検討しようと考えた。重大なヘーゲルによるカント誤解が見つかったのはこの過程であった。

よく知られているように、カントは強大な権力・軍事力をもった唯一の統一国際国家ではなくて、現代のEU構想にみられるような、各国の主権を認め、また各国が最終的に常備軍を全廃し、自国の政治体制を共和制にする等、こうした条件を満たしていくところでの各国の連盟(国際連盟)が平和連盟になるとしてあるべき国際的平和の機構を構想した。今日においても有意義な構想だと私は考えているが、カントのこの平和連盟としての国際連盟の実現した姿を、カントが君主同盟を提案していたとの理由でヘーゲルは実は、1814年にメッテルニヒ主導のもとにつくられた神聖同盟にみた。神聖同盟はいうまでもなく王政復古体制側の共同戦線であり、カントがいう各国の共和制や常備軍全廃等の条件は当然ながら満たしていない。

なぜ、このようなヘーゲルによるカントの平和構想に対する大きな誤解が生まれたか。多少込み入った謎解きが必要だ。この謎解きのため、暑さも忘れさせてくれるいささかエキサイティングな夏となった。



■ 研究所 information * 詳細は変更されることがあります。最新情報は人間文化研究所ホームページにてお知らせします。

アンドレアス・チェザーナ氏講演 「新しい世界秩序におけるヨーロッパ Europa in einer neuen Weltordnung」

日時: 2005年10月12日(水) 15:00~18:00

会場: 名古屋市立大学人文社会学部棟 1階会議室

講演者略歴: Prof. Dr. Andreas Cesana (Mainz) 1951年スイス・バーゼル生。1979年にバツハオーフェンの歴史解釈に関する研究で博士号取得。1996年からマインツ大学教授かつ同大学の「一般教養講座」統括監督。

開催趣旨: EU憲法批准の問題がありながらも、深化し拡大するEUのなかで「ヨーロッパ」という概念がナショナルな文化的同一性の次元を超えた過程的・動的的概念として生み出されつつある現在の状況について講演していただきます。講演はドイツ語ですが通訳が付きます。

主催: 共同研究プロジェクト「越境する文学の総合的研究」グループ(科研費(基盤研究B)採択)

後援: 名古屋市立大学人間文化研究所

連絡先: 名古屋市立大学人間文化研究科 別所良美

TEL&FAX: 052-872-5834, bessho@hum.nagoya-cu.ac.jp

越境作家フォーラムの夕べ 「いかにして日本語作家となったのか - 境界を越える現代日本文学」

日時: 2005年11月9日(水) 18:00~21:00

会場: 名古屋市立大学人文社会学部棟 1階会議室

パネラー: 多和田葉子氏(日独語作家)、デビット・ソペティ氏(スイス人日本語作家)、アーサー・ピナード氏(アメリカ人日本語作家)、毛丹青氏(中国人日本語作家)

コーディネーター: 土屋勝彦(名古屋市立大学人間文化研究科教授)

開催趣旨: 日本語による創作活動を行っている新旧の越境作家たちが一堂に会して、越境文学の過去と現在について自由に語り合い、越境文学をめぐる根源的な諸問題や今後の方向性について考察します。

申し込み方法: 参加定員40名。下記E-Mailにて申し込み受付をいたします。表題に「11月9日越境作家フォーラム参加希望」とご記入の上、氏名、所属、住所、電話番号を本文にご明記ください。先着順にて受付します。参加可否の結果は、お送りいただきましたE-Mailアドレス宛にご回答いたします。(お送りいただきました個人情報は、本目的以外には使用いたしません。)

連絡先: 名古屋市立大学人間文化研究科

「越境する文学の総合的研究」グループ事務局

E-Mail: transnational@hum.nagoya-cu.ac.jp

主催: 共同研究プロジェクト「越境する文学の総合的研究」グループ(科研費(基盤研究B)採択)・名古屋市立大学人間文化研究所

名古屋市立大学
人間文化研究所